

【ちようつ菩薩】

昔、久我山の辺りに、伝右衛門さんという大層お酒の好きな人がおりました。お酒に酔うととても良い気持ちになり、何でも人の頼みごとを二つ返事で引き受けてしまう癖がありました。村人は、「畑仕事を手伝ってくれないかのう」「まき割の手伝いを頼むよ」と毎日のように伝右衛門さんのところへやつてきました。伝右衛門さんは、酒の上での約束事ですが、自分の仕事がどんなに忙しくても約束は必ず守り、愚痴一つこぼさないで、年がら年中忙しくしておりました。

「毎日毎日こう仕事が多いと、わたしの好きな酒もゆっくり飲めないなあ。でも村の衆が喜んでくれるのだから、それでわしの疲れもとれというものだ。死んでからゆつくりと酒だるの上で暮らすことにしよう」と酒だるを台石にした墓石をつくりました。そして、相変わらず村人の面倒をみたり、お寺の世話をしたりして年老いて亡くなり、村人に手厚く葬られました。

その後間もなく、伝右衛門さんの親戚の家に赤ちゃんが生まれました。この赤ちゃんは、毎晩夜中になると泣き始め、おばあさんがあやしても、若いお母さんがお乳を与えても泣きやみませんでした。「困ったものなのだ。どうしたものか。これでは家中の者が寝不足になってしまう」ある晩、この赤ちゃんがあまりにも泣きやまないで、お嫁さんは赤ちゃんを抱いて外に連れだしました。毎晩の疲れから半分眠りながら歩いておりますと、いつの間にか伝右衛門さんのお墓の前に立っておりました。「伝右衛門さん、伝右衛門さん、お前様は生きている間何でも頼みごとを聞いてくださいました。どうぞこの子の夜泣きも止めてくださいまし」とつぶやきますと、不思議なことに今まで火がついたように泣いていた赤ちゃんが、ピタリと泣きやんでしまったのです。

あくる朝、お嫁さんからこの話を聞いて、おばあさんは早速伝右衛門さんが大好きだったお酒をもって、墓地に出かけて行きました。

「伝右衛門さん、どうぞこれからも孫の夜泣きを止めてください」と持ってきたお酒を墓石にかけながらお願いすると、なんとその夜から赤ちゃんの夜泣きはピタリと治りました。

この話はたちまち世間に知れ渡りました。

近郷近在から、大勢の人たちが夜泣き止めの祈願にこのお墓を訪れるようになりました。そして、このお墓にお地藏様をまつり、「ちようつ菩薩様」と呼び今でも信仰されています。

このお地藏様にお酒をたくさんかけて祈願すると、酔っぱらって効き目がなくなってしまうそうです。お酒は少しだけかけ「治つたらたくさん差し上げます」とお祈りするとよいとか……。

文・カット 杉並民話の会 参考 森泰樹著『杉並の伝説と方言』

令和三年(2021年)十月より十八回お届けしました
「わがまちの民話」も今回で終わります。

ご紹介させて頂いた民話は「杉並民話の会」の皆さんが杉並に埋もれていた昔話や民話を採話し文章にまとめたものを、「杉並民話の会」のご協力を頂き掲載いたしました。わがまち杉並を知り、地域の皆さんの心の輪を繋いでいただけたらうれしく存じます。

原稿を寄せて頂きいろいろご助言を頂きました杉並民話の会 小倉ヤス子さんに心から感謝申し上げます。

長い間お読みいただき、ありがとうございました。

